

放課後の実習

2016年1月。私の実習は、放課後に始まる。病院実習が終わったその足で、祖母の入院する地元の病院へ向かう。90歳を過ぎた祖母は心不全と胆管癌のため年末から入院しているが、このごろ目に見えて衰弱し始めていた。ベッドサイドに行くとまず、顔色を見る。体調が良く意識がはっきりしているようなら、その日の実習の様子など、世間話を交わす。寝ている時はそっとしておくが、大抵は私が来ると目を覚ましてくれる。

「放課後実習」は夕食の時間と重なることが多いため、食事介助は必須の技術ということになる。入院してすぐの頃は車椅子を押して食堂へ行き、見守りだけだった。固形食を、入院前と変わらぬ勢いで口に運ぶ。相変わらず食い意地が張っている。もちろん、いい意味で。

節分を過ぎ、寒さが一層厳しくなってきた。それまでトイレ介助だったのが、オムツ交換となる。食事もベッド上。離床する機会が失われ、衰弱の一途を辿っていることが客観的にも明らかだった。私が顔を出すと、「また来たね」と絞り出すように喉を鳴らし、しわを寄せて笑ってくれるが、私と居ても傾眠している時間が増えてきた。

「今できる、できる限りのことをしよう」と思った。でも、何だろう。どうすれば喜んでもらえるだろう。そんな事を考えながら帰路に着き、家に帰って祖母の部屋からお気に入りのコートとお手玉を拝借した。次の日。「ばあちゃん、コート持って来たよ。寒い言いよったけん、上から掛けとくね」と布団の上からコートを掛けた。目を閉じたまま、そっと笑った、気がした。「それから、お手玉。上手だったでしょ」と布団の中の両手にお手玉を握らせた。これは祖母にとって温かみのある握手より効果的だったらしく、徐に手を布団の外に出した。さすがに玉を投げる体力はなかったが、その一歩手前まではできた。その手には「お手玉をしよう」という意志がはっきり宿っていた。それだけで嬉しかった。できる限りのことをしようとした私の行為が、確かに彼女に伝わっていることが実感できたのだから。

「早よ看護師ならなんよ」が、私に対しての口癖だった。早くも何も、働き始めるのは来年4月からと決まっている。だから、それまで目を開けていてほしい。そんなやり取りを何度繰り返したのだろうか。2015年のクリスマス・イブに入院した祖母は、その2ヶ月後に息を引き取った。四半世紀も暮らしを共にする中で、楽しみや喜び、時に厳しさを教えてくれた祖母。最期に少しでも恩返しができただろうか。いや、きっとまだまだ足りない。だから、返しきれなかった祖母への恩は、これから看護師として働く中で患者さんに還元していこう。それが、祖母が残してくれた私への宿題だと思う。